



探偵同好会にて



～小さき探偵と見習いワト
ソン～

美魚

彼女の正体

キーンコーンカーンコーン♪

何気ない日常。何気ない普通の学校、クラスの風景。

その中で1人だけ浮いてる少女がいた…いや、浮いているって言うか自分から人を近寄せない雰囲気を出してる感じか？

長い黒髪、白雪姫のような白い肌、目は普通くらいで…後、全然笑わない、多分ツンデレ。その一人だけ、どの生徒とも違う雰囲気を持った彼女に俺は自然と目が惹かれてしまう。

「…何？」

「いや、何も無いけど…」

「そう」

ん…相変わらず無愛想だな。

「……………そう言えば…」

「ほらほら、みんな席に着け！終礼始めるぞ」

彼女は何かを言いかけたが、担任が来たのでひとまず着席。

終礼中、担任はいろいろと言っていたが俺は気にもとめず、彼女の言葉の続きとこの後起こす行動について考えた。

その後終礼はすぐ終わり…

そして放課後

「はあ～、疲れたな…帰るか」

「おーい、加藤～帰ろうぜ」

そう言ったのはクラスメイト兼友達（多分…）である井上だった。

「え～、俺一人で帰りたい」

「そう冷たいことを言うなよ！っておい！！！」

俺は井上の言葉に耳を傾けずさっさと帰った…そうすべては、あいつの秘密をあばくためだ！

あいつ＝黒いツンデレ女。（デレは俺の予想）

学校が終わったらスタスタと帰って行く黒い(略)はいつも時間通り帰っていくんだ。

俺はそれを不審に思ったし、何よりもあいつはもともとから雰囲気が怪しいのでとりあえず何とかつきとめたいとも思った。

スタスタ…のこのこ…スタスタ…のこのこのこ。

黒い(略)の後についても全くばれていない！それにしてもあいつ鈍いな…

建物？何か一軒屋くらいのでかさの建物に入った。しかもここ薄暗くないか。

「ボタン」勢いよくドアを閉めた。中の様子をばれないように窓から覗こうとすると…「ドゴッ」

「い痛つつつ」思いつき後ろから足蹴りされた。

「…誰？」

ってお前は誰かも確認せず、蹴ったのかよ！

言いたい気持ちを抑えて「俺、同じクラスに加藤だけど…」

「あっ…」何か物言いたげな顔をし、出てきた言葉は…「す、す、ストーカー？」

「断じて違う！！！」

＊

まずあまり怪しまれないように（充分怪しいけど）とりあえず、茶化した…が話してくれる訳もなくただひたすら時間が経過していった。

「……………」

よし、このまま無言を通すつもりなら俺は思い切って聞いてみよう。

「お前さ、何でこんなところにいるの？」

彼女の目は少し動揺していた。失礼だけど、ちゃんと感情が顔に出るんだな。

続けて「お前さ、クラスの誰ともまともに喋らないじゃん。でも俺とでは会話が一応続くよな」

俺は予想している。そしてそれは多分答えに近い、いやそのものだ。

言う。

、 、 、 、 、 、 、

「それは、俺の親父が有名な探偵さんだからか？」

俺の答えあわせは彼女の目がすべてを悟っていた。全問正解？

ただ、ためらっていた。自分がこれから言うことを、俺にどう話すのかを。

言った。

「その通りよ。」いつもの透き通った声。

「会話が続くだけでよくわかったわね、対した洞察力。…でも証拠が不十分。今回は私が自首したけど、本来なら探偵失格。」

何かこの生意気口調。まるで探偵気取り。いや…こいつは探偵になりたいんだ。

「俺さ、証拠とかなんかよくわかんないけど…多分、誰でもわかるぜ。」

「！！」

「…お前さ、図書館の赤川次郎、江戸川乱歩、コナン・ドイル……………推理ものの本全部読んでるだろ？図書委員だからわかる。それだけじゃない、新聞の事件などの気になる記事ははさみで切り取って学校でずっと悩んだ感じで見てる。」

彼女はただ無言。（って言うか、顔が唾然とし過ぎ…）

「つまりさ、お前は探偵になりたい…までも行かなくても、推理をすることが好きだと言えな

いか？」

さすがに証拠らしいものはないが、彼女はもうすでに完敗したらしい。

「…今日は本当に最悪。ただ黙っていれば、普通すぎて何のとりえもない一般人に見抜かれるなんて。」

言われようがひどい…。

「…私の夢は探偵になること、出来ればシャーロック・ホームズみたいなカッコいい人になりたい…」

意外に乙女？

「でも私だって、何でもかんでも一人で出来るわけじゃない。だから私には助手が必要。」
嫌な予感…

「だから、私のことを見抜けたあなたが助手になってくれないかしら、ワトソン君？」
クラスの大半が君のことに気付いてるよ…なんて言えなくて「別に強制的じゃないのよ」と言ってるのにも関わらず目は怖くて、俺はまさに蛇に睨まれた蛙の状態だった…。

出てきた言葉は、「はい…。」

はっきり言えない男は、情けなくワトソン君になった…だって絶対嫌とか言えないし…。

しかし、今思うと俺はこの状況を楽しんでたのかもしれない。いや、この状況が来るのを待ち望んでいた。

これからどんな悲惨な目に遭うとも知らず。

彼女からいろいろ事情を聞いてみると、どうやら一人暮らしで自分の家？で探偵事務所を開きたいと思ってるらしい。

(だから看板に探偵屋って言う文字と、猫と思われる下手くそな絵を描いてる訳か。．．)

俺は口を開き「でもさ、こんなとこって人が集まりにくいじゃん。

だから学校で『お悩み事・事件を解決します！』みたいな部活作ればどう？」

とか言ってみた。

適当に言った発言が、まさか後の不幸を招くとは思っても知らなかった…。

彼女はうなづく。

「それは良いかもね。でも何でも屋じゃないんだから…」

「…それくらいやらないと人や事件は来くないか？」

……………どうやら納得したらしい。

「わかった。じゃあ部活を作る！！」

やると決めてからの彼女の行動力は凄かった。

とりあえず話は一旦終わり、今日は自分の家に帰った。

最初の事件

・・・次の日

もう部活は出来ていた…（一応、同好会としてだが）

たしか部活を作る時は最低5人以上集まらないと駄目なんじゃないか？

あいつ、何したんだ…？

本人に聞いてみると、

「フフフツ」だって。

…怖っっっ！！

「放課後は来なさい。今日から部活を始めます。」

「はあ～」

学校のいたるところには「シャーロック・ホームズ同好会：悩み事、事件何でも解決します。…来たれ！！（マスコットと思われる猫の絵）」というポスターが貼ってある。

俺が思うに（絵の下手さはともかく）ネーミングセンスのなさ、怪しさはどの部活よりも一番だ。

「大丈夫かよ…こんな部活」

授業中もずっとそのことを考えてた俺は放課後までが長く感じられた。

そして放課後

俺は彼女をいつも「お前」と言う一人称で読んでいたが、どうやら本人は不満らしく名前を音読みにし、コウ探偵と呼べと言われた。

（本人は名前と呼ばれることも嫌っている）

もちろん俺は探偵などと付ける気は毛頭もないが。

コウと俺は拝借した部室？でずっと人を待ってたが来る訳もなく1時間がたった…

「なあ、多分部活できたばっかだし…今日は諦めようぜ」

さすがに同意したようで「そうね…」と言って、俺達は帰る身支度を始めた時

「ガチャ」

ドアは開いた。

「あの～、悩み事や事件を解決してくれる部活ってここですか…？」

「！！！」

まるで漫画や小説のように運の良い展開に俺はとにかく嬉しかった。

なので、「ようこそ！シャーロック（略）同好会へ！！」

「…。」

「こらっ、ホストじゃないんだから…」呆れた声でコウは言う。

「ところでどうしたのかしら？」

コウの問いかけに、困った表情で入って来た女の子は口を開く。

「あの事件とかがって言う程、大層なことじゃないんですけど…」

*

入ってきた女の子は小林 夢さんと言う名前だった。

俺らより1つ年下の後輩らしい。

小林さんは重い口を開いて「いじめって言うか…靴に画びょうが入れられたり、教科書がらくがきされてたりそう言うことがあったんです。でも何だか最近どんどんひどくなってきて…」

涙をこぼさないように頑張りながら

「でもでも心あたりとかあまりないし、あたしどうすればいいんだ、ろって…」必死にこらえようとした涙はあっけなく流れ、すぐに泣き顔に変わってしまった。

その告白を聞いたコウは「話してくれてありがとう、要するに小林さんは一連のことをした犯人を見つけたってことなの？」

「いいえ、見つけたって言うか止めれたら良いなって…」

でも、どちらにしろ犯人は見つけないてはならない。

……………いつの間にか下校の放送は鳴り、コウは泣きじゃくる小林さんの背中をさすいながら送っていった。

日はすっかり暮れ、俺も家に帰った。

帰宅後、風呂に入りすぐ上がった。

携帯に新着メールがあったので見ると「明日から調査を開始する」…予想通りコウからのメールだった。

少しため息をついた俺は当たり前のことを思った。

「あ～、明日も大変になりそうだ。」

操作と手がかかり

翌日、コウは朝一番に学校に到着したらしく待ちくたびれた顔をしていた。

「遅い！何分待たせてるの！あなたが遅いからもう小林夢の交友リストを作ったのよ」
ルーズリーフにはズラーっと小林さんの交友リストが書き記されている。（って言うか簡単なプロフィールから個人情報まで…）

「ゆっくりしてると事件は一向に解決できないでしょう！」

怒った顔のこいつを見る。

やっぱ思った通りこいつは良い奴だ。人のことになると人一倍頑張る、いや自分だって犠牲にしかねない。俺には真似出来ない…。

俺がいろいろ考えてる最中に、強烈な肘打ちがはいった…

「ゴフッ」

「何呑気な顔してるのかな？この役に立たない家畜以下野郎さん☆」

あの～コウ探偵、初めの頃とキャラ崩れてません？

コウの作った交友リストを見る。やはり妥当なのはクラスメイトか吹奏楽部の人達だろうな。

「やっぱり妥当なのはクラスメイトか吹奏楽部の人達よね。」

えっ!?! 今、心読まなかった？

「とくに親友の中村優花って子は気になるわね……………よし！本人に根ほり葉ほり聞くわよ！！」

～昼休み～

小林さんの教室に来た俺達は中村さん呼び出すことにした。

「すみませーん、中村さんいますか？」

ちょうど席に座っていて、小林さんとお弁当を食べ終わったらしく俺の呼びかけに「はい？」と答えた。

「あの～、ちょっと話とか聞きたいんだけどいい？」

OKを出してくれたのか、すぐ俺達のところに来た。

「えっと、夢のことを解決してくれる先輩方ですよ？どうしたんですか？」

「小林さんのことを解決するためには、いろいろと普段のことを聞かせて欲しいの。いいかしら？」

コウの言葉に「わかりました」と言って、とりあえず(仮)部室で話すことにした。

～部室にて～

最初に口を開いたのはコウだった。

「あなた小林さんの親友なのよね？最近、小林さんに起こったひどい事件の数々についてどう

思う？」

おいっ！いきなりだな…

「やった奴は最低だと思います。私も夢をいじめた犯人を捕まえたいと思ってるのに結局探し出せなくて…」

「友達思いなのね」

「……………自分は親友のために何もしてやれないことに不甲斐なさを感じています…」

「答えてくれてありがとう。もう一つ聞いていい？今の小林さんの交友関係に異常とかないかしら？」

「うーん、そこまでないと思うんですけど…最近、吹奏楽部の子とあんまり仲良くいってないかもしれない…」

「それはどう言うこと？」

「うちの吹奏楽部ってかなり人数多いじゃないですか、だからレギュラー争いも激しいんです。夢はその中でも頑張ってレギュラーを取ったんですけど、レギュラーになれなかった子たちと、無視とかはないけど、やっぱりうまくいってない…って夢は悩んでました。」

「そうなの…」

「私からのお願いでもあるんですけど…絶対、夢にひどいことをした犯人を見つけてください！そして止めてください！！」

「わかったわ。」

そうこうして話は終わった。

予鈴が鳴り中村さんと俺達は教室に戻ることにした。

「放課後、また調査するわよ」俺はうなずく。

そして放課後

吹奏楽部に行くことにはしたのだけれど、練習の邪魔をしてはいけないので練習が終わった後すぐ、レギュラーになれなかった小林さんの友達に聞きこみをすることにした。

それまで俺たちは…日向ぼっこをすることになった…。

「何で日向ぼっこなんてしてるんだ…？」

「探偵には休憩も必要よ。…加藤はお父さんと仲良いの？」

あっ 初めて苗字で読んだ。

「全然。中学入ってからは、まったくちゃんと話したことがない。」

「そう…」

「親父と話したいのか？」

「べ、別にそんな厚かましいこと思ってないんだから！」

何だ、その微妙なツンデレ反応…

「話したいなら、言ってみようか？」

「……………」

「って、すでに寝てらっしゃる！！」

(まあ、だからクラスでまともに話した人は俺だけと言うことだが…)

最近こいつとよく行動してたからだろうか？いつの間にか俺もうとうとして寝てしまった。

目を開けたらもう夕暮れで、黄色と赤が交差したような感じが綺麗だった。
って違う！！！！

「おい、もう部活終わってるかもしれないんだぞ！起きろ！！」

「んう…むにやむにや…はっ！！！」

俺らはダッシュで音楽室に行き、吹奏楽部はまだ片付けの真っ最中だった。（セーフ）
そこにいる片付け中の女の子に聞いた。

「いきなりだけど、岡部さんと遠山さんと佐倉さんっている？」

俺があげた名前は、まさにレギュラーにはなれなかった小林さんの友達だった。（コウのリストを参照）

「あの、私が佐倉ですけど…二人も呼んで可以吗？」

「うん、頼むよ。」

佐倉さんは二人を呼び掛け、部活が終わった後、少し話があると俺は言った。

～部活後～

「話って何ですか？私早く家に帰りたいんですけど…」そう言ったのは遠山さんだった。

「ごめんごめん、聞きたいことがあるんだけど…」と俺が言いかけた時、コウはそれを遮った。

「単当直入に聞くわ。あなた達は小林さんとケンカしてるの？」

「あなた一体何なの？」そう言ったのは岡部さん。

「何でもないわ。ただの通りすがりの探偵よ。」

「はあっ!？」

うん、そうも言いたくなるよ…

「でっ、どうなの？」

「あの、確かに私達は今、夢と仲良いつて状態じゃないけど…吹奏楽でそう言うことはよくあるし、ぎくしゃくした関係をまた前みたいに直したいって思います。」佐倉さんは勇気を出して言ってくれた。

「私もよ」と岡部さん。

「わかったわ、私もいきなり聞いてごめんなさい…」

コウは自分の行動に少し反省。

「後、小林さんは自分のトランペットを使っているのかしら？」

「いえ、今は学校の古い備品のやつを使ってます」と遠山さん。

まだ返ってきてないのか…。

「あの、話ってこれくらいでしょうか？」と佐倉さん。

「ええ。」

「じゃあ、今日は帰らせていただきます、何かあったらまた言ってください」

佐倉さんは丁寧に辞儀して3人は帰っていった。

、 、 、 、 、 、

…ますますわからなくなった。でも誰かが嘘をついてる気がする。勝手な俺のカンだけど…
結局、この日も手がかりは掴めず俺達は帰宅した。

*

三度目の朝日が昇った日。

コウは手がかりを掴めないことにもどかしさを感じているのか、俺に話掛けてこなかったし、部活をするとも言ってこなかった。

仕方なく今日は井上の駄弁りに耳を傾けた。

…部活がない日の1日はあっという間過ぎ、放課後俺は掃除にあたり体育館を掃除をしていた。

「相変わらず、何でこんなに汚いのか…疑問だ。」

バルコニーを掃除していた俺は下を見ると、舞台の方に楽器があった。

県大会に出る吹奏楽部のレギュラーはここで練習しているらしい。

そう言えば楽器は舞台裏の方にあったな～、小林さん達頑張ってるんだよな～とか呑気なこと考えていると、舞台裏の方に向かう人が見えた。

あの小柄な体型は…佐倉さん!?

レギュラー以外の人はこちらに来ることはないと思うんだが…先輩に楽器運びを頼まれたとか?

気になった俺は「井上、後の掃除は任せた!」とほったらかしにし、井上の返事も聞かずに颯爽と舞台裏に行った。

舞台裏に行くと佐倉さんは持ってた楽器を下ろしていた。

「佐倉さん?」

「はっ、はひ!?!」

「楽器運びしてるの?」

「あ…、はい。」

「大変そうだね、重い楽器なら俺があっちに持って行くよ。」

「いや、あの…いえ…」

「遠慮しなくても、女子があんな数の楽器持って行くのはしんどいでしょ。」

俺が少し持って行こうとすると…

「やめてください!!!!!!」

その声にびっくりして楽器を落としてしまった。あー、箱に入ってた良かったと安堵しているのも束の間、箱に本当はないはずの名前があった…

「小林夢」俺は名前を読み上げた。

「…。」

もう佐倉さんは何もかもを諦めた目をしていた。

「そうです。夢に嫌がらせをしたり、楽器を隠したりしたのはわたしですよ。」

「…。」

……………こうして事件はあっさりと解決した。いやあ、めでたしめでたし。

……………あれ？

*

あの後、佐倉さんは「大丈夫です、夢にはもうちゃんと本当のことを言うつもりだったし、許して貰えないと思うけど、謝ります」と言った。

まるでこれ以上追究しないでと言ってるように。

自首をするなら何も言えまい。

俺はそのことをそのままコウに伝えた。案の定、コウも腑に落ちない顔をしている。

でも彼女は「そう…なら解決ね…」としか言うことが出来なかった。

こうしてシャーロック・ホームズ同好会は一つ事件を解決した。

……………って言う程、俺は甘くない。

毎日毎日、俺は佐倉さんに話を聞こうとした。

一般的に見たら、佐倉さんの言ってることを信じたらいいい。ありのまま信じたらいいい。

でも違う…違う

俺の体がまるで違うって言ってるように頭より体が先に動く。

毎日佐倉さんの教室に向かう俺に佐倉さんはうんざりしていた。「警察呼んで、ストーカーって言いますよ」と脅しもかけられた。

それでも何回も行った。

やはり人間いつか折れるものだ(しょーもない同好会に入っている、ある偉い中学生男子は言う) 佐倉さんはある日ぼっきり折れた。

「何ですか…？しつこいです」その日も、いつの日かのおしとやかな雰囲気は消え、仏頂面ヅラで言う。

「前、言ったことで嘘ついてない？」

「ついてないってば！！しつこいな！！！」

どうやらキレた。

俺はいつもとは違う言葉をなげかけた。

「佐倉さんは俺が守るから。」

「…。」

その言葉だけでももう反応は違った。目が助けてと言っている。

それでも強がって「嘘つき！！」となげかけた。

うん。我ながらそう思う。守るなんて曖昧な言葉を使ってる俺はとんだ阿呆だ。

それでも…

「助けたい、小林さんも佐倉さんも…」

何かが折れた。

それだけで泣き崩れた。

佐倉さんはずっと待ってたのかもしれない、そう言う言葉を掛けてくれるのを。

とりあえず、男なので抱きしめることにした。でも本心を言うと俺はこういう状況にかなり困っている……………

*

「あ～、佐倉って本当に使い物にならない」あたしは汚い言葉を吐きだした。

自分がクズだってことはわかっている、でも…それでも解放されたかった…。

誰かが近づいてくる…あたしは誰だかわかっていた。

「どーも、加藤先輩！」

「どーも、悪質な後輩さん♪」

「…いったい、どうしたんですか？」

「君を探してたんだよ。教室にいたんだね。」

「へえ～、それはどういった用件で？」わざととぼけてみる。

「君でしょ？小林さんに必要ない嫌がらせをし、佐倉さんの弱みを握り、代わりに行動させたのは？」

「嫌だな～、言いがかりも大概にしてくださいよー、証拠もないのにー」

「うん、証拠はないよ。ただ君が自首してくれることを信じて来たからね。」

「先輩～、馬鹿ですか？ あたしがそんな良い人ならそんな悪質な嫌がらせするわけないっしょ？」

俺はこの時、本当に自分のことを大馬鹿だと思った。何の証拠もないのに、カンで来た俺は一体何しに来たんだ？と

あ～、マジで参った。こう言う時って確か正義のヒーローが助けてくれるはずなんだが…

「ドンツツ！！！」物凄い勢いでドアが開いた。

俺を助けてくれる正義のヒーローはまさしく、コウ探偵であった。

「…証拠ならあるわよ。」

コウは佐倉さんと小林さんと一緒に来ていた。

「佐倉っ!？」

「佐倉さんは、あなたに脅され小林さんへの嫌がらせを命令され実行しました。と言う貴重な証言を言ってくれました。」

「そ、それは勝手な言いがかりにもなるじゃない！ 私にならないじゃない！！」

「じゃあ、これは？」

どうやら、ボイスレコーダーみたいだが…

『夢のトランペットを壊したら何も言わないよ』

『で、でもそれは…』

『じゃあ言っても良いの？』

『そ、それも…』

『悩んでる暇あったら、早くしたら佐倉さん？』

『ブツツ…』途切れた。

「これって立派な脅迫って言えない？他の生徒の証言とかもあるんだけどね…。いい加減吐いたらどう？中村さん。

「…だから」

「えっ？」

「だから何？」

まさかの言い返しだった。

「夢なんて最初から嫌いだった！！いつも私に依存してばかり。自分では何も出来ない癖に私からいつも取っていった！！」

好きな人も友達も…あたしから何でもかんでも取って行ってあたしになろうとしてた。」
いきなりの告白にびっくりした。

「バチンッ！」

俺の頬に思いっきりビンタがきた…

「あっ！すいません…」

どうやら小林さんの中村さんに向けてのビンタがそれで俺に当たったようだ…。

いてえ…ドジっ娘もほどほどにして欲しいな…

小林さんは気持ちをたてかえて、

「そんなの最初から言ってくれば良いじゃん…私はドジだし、一人じゃなにもできないから優花の真似ばかりしていたよ。楽だったもん。でも私アホだから優花が苦しんでるって気がつか
なかつた…優花ごめんなさい。優花が私を許さなくていい、でも私も優花のやったことを許さ
ない。自分勝手なのは知ってるから…」

ただそこに流れてた空気は俺らにはどうしようもなかつた…

事件は解決しただけだった。

嵐の明けた日の探偵は

朝、俺は学校に行く途中、コウに会った。って言うか待ちぶせされていた。

「おはよう」

「お、おはよ…う…」

「何でまた待ちぶせ？」

「そ、それは……………ごめんなさい」

俺はその意味を理解できた。それは小林さんと中村さんのことだと。

コウも俺も二人はまた仲直りできるんじゃないか？と考えてた。いや心のどこかで信じてたんだ…

でも現実はそのそんなに甘くはないのか、二人が仲直りする極めて低いだろう。

それでも俺達はいつかできるんじゃないのだろうかと思っている。

コウは自分の力不足に後悔している。結局、中村さんを追い詰めることになってしまったと…

佐倉さんは弱みをばらされずにすんだようだ。コウは弱みについて知っているがまあその…簡単に言えることではないらしい…

俺には事件について一つだけ疑問が残った。

「あのさ、中村さんが犯人ってわかった決定的な証拠のボイスレコーダーって、コウが取ったの？」

悪いことをしてばれた子供の様にぎくっとしている。

「あれ…私の声…」

「えっ…」

「私、いろんな人の声真似できるって言うか…某コナン君みたいな感じに…佐倉さんのセリフは演技して貰ったの…。」

…要するに俺らは決定的な証拠を見つけてなかった訳か…。探偵としては最悪だ…何がシャーロック(略)同好会なんだか…

「俺達のしてることは、かなり最悪だが…それでもお前は探偵になりたいのか？」

「うん…」

強い意志だった。

その意志に免じて許した。でも俺達は二度と失敗しない。

何だか俺はどうでもよくなったのか、コウの頭を撫でた。

「お前は白雪姫って柄より小人って感じだな…」

意外に反撃はなく、コウは照れくさそうに苦笑いをした。

探偵同好会にて

<http://p.booklog.jp/book/30643>

著者：美魚

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/notibaba0512/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30643>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30643>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.